

ベラルーシから学ぶ 私たちの未来

～チェルノブイリ原発事故と福島原発事故を振り返る～

2012年12月11日（火） 12:50～17:10

宇都宮大学峰キャンパス 基盤教育B棟1121教室

【プログラム】

総合司会：加戸廉矩（工学部機械システム工学科3年、FnnnP Jr.）

- 12:50 挨拶 進村武男（宇都宮大学学長）
内山雅生（宇都宮大学国際学部長）
- 13:00 基調講演「ベラルーシの経験を踏まえて日本で応用する力を～国や民族の違いを越えて」
辰巳雅子（チロ基金代表、ベラルーシの部屋主宰）
- 14:20 休憩（質問票回収）
- 14:30 パネル・トーク「辰巳さんと4学部横断トーク～ベラルーシと日本をみつめる～」
司会 田口卓臣（宇都宮大学国際学部准教授）
パネリスト 辰巳雅子
加戸廉矩（工学部機械システム工学科3年、FnnnP Jr.）
田中えり（国際学部国際社会学科3年、FnnnP Jr.）
水庭誼子（農学部森林科学科3年）
佐藤聡太（農学部農業環境工学科2年、FnnnP Jr.）
平松 舞（国際学部国際社会学科2年）
青柳千穂（教育学部総合人間形成課程1年）
コメンテーター 高際澄雄（宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター長、教授）
フロアからの質問票への回答
- 16:00 休憩
- 16:10 参加者によるグループトーク
- 16:30 各グループの発表、質疑応答
- 17:00 閉会の挨拶 茅野甚治郎（宇都宮大学理事）、高際澄雄
- 17:10 閉会

主催／宇都宮大学国際学部、宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター、
宇都宮大学生国際連携シンポジウム学生実行委員会2012

後援／栃木県、宇都宮市

講演者およびパネリスト紹介

【講演者略歴】

・辰巳雅子（たつみまさこ）氏 「チロ基金」代表。ミンスク市日本文化情報センター勤務。1995年よりベラルーシに在住し、現地の生活と文化への深い理解に基づいて、チェルノブイリ原発事故後の被曝児童たちの支援に携わる。2011年9月、ベラルーシ・ベルラド放射能安全研究所副所長、ウラジーミル・バベンコ氏の『自分と子どもを放射能から守るには 日本語特別編集版』（世界文化社）を翻訳し、日本に紹介。長年に渡って書き綴られてきた「ベラルーシの部屋ブログ」<http://blog.goo.ne.jp/nbjc/> は、福島第一原発事故後の日本において注目を集めている。上記ブログとともに、「ベラルーシの部屋」HP <http://belapakoi.sl.xrea.com/> を主宰。

【教員紹介】

・高際澄雄（たかぎわ すみお） 宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター長／教授。専門領域イギリス文化・文学研究。主として、イギリス18世紀文学と文化を研究に従事。現在ヘンドルの歌劇と文学の関係を調査。「ロデリック・ランドムにおける奴隷貿易」（『イギリス18世紀文学研究』開拓社1996）、「ボイスの第2セシリアオードにおける詩と音楽」（『イギリス18世紀文学研究』開拓社2010）など。

・田口卓臣（たぐち たくみ） 宇都宮大学国際学部准教授。福島乳幼児・妊産婦支援プロジェクト。フランス哲学。著書『ディドロ 限界の思考』（風間書房、2009年）、『フランス文化事典』（共著、丸善出版、2012年）。論文「放射線の人体への影響に関する先行研究に基づく福島原発事故への対応策の批判的検証」（阪本公美子、高橋若菜との共著、宇都宮大学国際学部研究論集32号、2011年）。

【学生パネリスト紹介】

・加戸廉矩（工学部機械システム工学科3年、FnnnP Jr.）

福島県いわき市出身です。下記の佐藤聡太に誘われFnnnP Jr.の活動に参加しました。私からみた福島原発事故問題は不明瞭で、考える場としてこのシンポジウムへの参加を決めました。司会を務めさせていただくことになります。

・田中えり（国際学部国際社会学科3年、FnnnP Jr.）

福島県浪江町出身の私にとって、第一の関心事は、原発事故そのものではなく、その背景にいる、避難を余儀なくされている方々についてです。その視点から、今回のシンポジウムでは考えていきたいと思い、参加しました。

・水庭誼子（農学部森林科学科3年）

大学入学後から県内の農家さんと農作業をし、森林を学ぶ者として林業地へ行く機会も多く、地域で学生ができることを模索しており、「3.11と学問の不確かさ」という講義を受け持つ先生にお話を頂き参加する運びとなりました。

・佐藤聡太（農学部農業環境工学科2年、FnnnP Jr.）

私は昨年のシンポジウムを通してFnnnP Jr.というボランティアで活動をしていました。活動を通して国際学部の阪本先生に今回のシンポジウム企画の声を掛けて頂き、昨年参加したこともあり実行委員の一員となることを決めました。

・平松 舞（国際学部国際社会学科2年）

原子力発電所の建設・稼働の裏側には、歴史、政治、経済状況の地域格差など様々な要因が絡み合っています。未曾有の危機に直面し、エネルギー問題とどう向き合っていくべきなのか、文系理系の壁を越えて考えたいです。

・青柳千穂（教育学部総合人間形成課程1年）

東日本大震災が高校2年生のときに起こり、1年間福島で生活してきたため、福島の原発事故や放射線教育に興味があります。多面的に捉え、事故を受け止める手掛かりにしたいというのがシンポジウム参加の動機です。

